

7、我が植民地に於ける内地人入移民

地理學評論 五卷二號 武見 芳二

8、人口の増加率と活力指數に就いて

地理學評論 四卷五・六號 石田龍次郎

9、日本の地理區

地理學評論 三卷一號 田中 啓爾

10、日本の經濟區

地理教育 十卷四・六號 富士德次郎

伊太利ところぐ

(二)

瀧川 規一

【ファシストの生立】 人間社會が流動性である

ことはベルグソンの流動哲學を研究しなくても吾人社會人は日常經驗する處である。流動して止まないのが人間社會の常態であり人間社會の諸相及び諸現象は海洋の波濤をもつて象徴することが出来る。一波消えてはまた一波生まると政治界經濟界及び思想界の何れを問はず社會の諸相は波瀾重疊の姿をとつて常に動いて居る。動く處に力が潛み激する處に力が顯はれる。波瀾は常に平衡に歸らんとし平衡は常に波瀾を孕む。激烈凄慘なる衝突反撃は相反する等價力の

衝突接觸に他ならないのである。斯くして現はるる結果は意外の如くにして意外ではない。吾人にとつて過去の事象より結論することが容易なるも未來の事件を卜占することの困難がある人心は屢社會の靜穩無事を飽くのであるが、小波瀾が絶えず且つ長年月に亘つて連續する時にも亦飽を覺える。さりとて大波濤の連續する時にも亦飽く。必竟するに適處適時の波瀾さへあらばよいのであるとしか云ひ得ないのであるが社會の現實相に對しては斯る抽象言は何等の價值を有しないのである。また社會の大波濤は破

壞に効を奏することもあるが、徒らに社會自體を損傷したに過ぎないことがある。破壞的政治家等が破壞後の建設振りを誇り語るのであるが、必竟重傷を蒙つた患者が治癒の早きを誇るのど等しいのである。

斯くの如く人間社會には一波濤と見做す可き一大運動が時々惹起されることがある。而してその運動が政治的なる社會的たるを問はず、何れも名を藉るに國家社會の安定てふ目的をもつてしてゐる。實際に於ては『安定』と云ふ標語を振り翳して政權の常握を目的とするのである。ファシスト主義も亦御多分に洩れず社會相の一波濤として生まれ出でて今日遂に一國の政權を掌握し得た一例に過ぎないのである。然しながら今日の大をなすに至つたファシスト黨と雖も徹頭徹尾單一なる主義を振り翳し押し通して來たのでない。今日に至るまでは種々なる横波縦波に遭遇して大小の波濤を或は撃退し或は併呑し種々なる潮流に順應しつゝ今日の大をなしたのである。

伊太利に於て民主主義及び社會主義の思想が勞働階級をはじめ、都鄙の產業者間に知られ始めたのは今より約三十年以前であつた。伊太利に於ても他國の例に洩れず斯る思想は最初知識階級によつて理解され宣傳された。次に漸次有意識無意識に社會一般に承認され政治的產業的諸設備に試験的に實施された。やがて無產階級が漸次政治的に地歩を進め議會に於ても勢力を増した。彼等は政權確保の結果として無產階級の生活標準を高めることが出來、多くのトレード・ユニオン (Trade Union) と勞働消費組合 (Co-Operative) を組織することが出來た。斯くの如くにして民主主義及び社會主義は一九一三年及び一四年に至る頃には順調に進んで殆ど國家の主權を掌握することを得んとするまでに漕ぎ着けて居つた。然るに何ぞ圖らん一九一四年には世界大戰と云ふ一大狂瀾が捲き起つて彼等の主義は根柢から覆へされたのである。

世界の大戦は歐洲の小大國に波瀾を惹起した各國は戦争の去就を決するまでに國內的に種々

の動搖を惹起した。動搖の主要なる特徴は各國國內に於ける主戰論者と非戰論者との葛藤であつた。戦後は戰勝國戰敗國を問はず種々の社會問題思想問題を惹起し今日猶爲政家にとつて頭腦の種である。

伊太利に於ては大戦の當初に當つて主戰非戰の兩派が劇烈なる論争を繼續した。當時中立的態度を主張した連中には第一に社會主義論者が居り人道主義の論者が居り平和論者が居つた。加教の信者も亦これに加はり知識階級も中立維持者であつた。更に大衆は戰爭避忌者であつた當時の支配階級も亦戰爭が間接に伊國に齎らす可き利益を豫想して戰爭參加を欲しなかつた。何れにしても多くの人命を犠牲にする殺戮行爲は戰勝の果をもつてしてもこれを償ふ能はずと考へたのである。

斯くの如く輿論が非戰論に傾けるに拘らず社會の一隅に中立主義論者の微溫的態度に賺らぬ一派が居つた。その一派は主として社會主義者中の極左派とも稱す可き革命派であつた。革命

派は戰爭に參加することを主張した。彼等は同志を集めて結束團 (Fasci) を作つた。その目的は非戰論者たる當時の政府當局者を動かし戰爭を嫌ふ勞働階級を抑へ以て輿論を壓して中立微溫的態度を放棄せしめるにあつた。彼等の主張が世界大戰に干與し干渉することにあつたが故に彼等は自らを稱して『干涉結束團』(Fasci Intervenisti) と呼んだ。この干涉結束團が最初社會主義者中の革命派から成立して居たが故に一九一五年頃には『革命行動結束團』(Fasci d'Azione Rivoluzionaria) と稱した。兎もあれこの干涉結束團員中にはその筆頭に社會黨の機關雜誌に主筆たりしムソリニ (Mussolini) が居つたトレード・ユニオンの首領株であつた。コリドニ (Corridoni) 及びアルチェステ・デ・アムブリス (Alceste de Ambros) も居つた。シンデカリス (Syndicalist) の理論家であり記者であるパヌンチオ (Panunzio) 及びマンチカ (Mantica) なども居つた。彼等は悉くその所屬した勞働運動政治運動及び職業同盟 (Trade Union) に於

て極端なる革命思想を抱懷した連中ばかりであつた。彼等の結束は一見社會主義者の團體の如く見えたがその實更に過激なる極端論者の集團であつた。上述の如くムソリニが極めて非妥協的な政治社會運動者の首領であつたが如く他の連中もトレード・ユニオン運動者中革命的傾向を最顯著に表してゐた者共であつた。従つて彼等は在來の穩順なる社會黨に反對した。また漸進的な進化的な議會の態度にも反對した。彼等は一九一四年の春に起つた勞働者の偶發的な一暴動にすら援助を敢へて惜まなかつた。彼等は國家及び政府を彼等の主張に従はしめ政權掌握者の顔觸を一變せんと欲した。彼等には世界大戰は絶好の機會であつた。彼等はこの好機を捉へて戰爭必要論を唱へ輿論と正反對の態度をとつた。

彼等の唱へる戰爭必要論に共鳴した者にはマチニ(Mazzini)の遺志を繼承せる徒黨及び共和黨が居り、革命主義にかぶれて居る知識階級及び大學生なども居つた。干涉結束團は戰爭必

要論を高唱すると共に國民の一致協力を強調した。一方社會主義者は國際主義(Internationalism)を信じ國際的協調と國際的友誼とを過信した。國際會議が社會問題を論議する程度に進むならば、領土問題、人種問題、國家主權問題等は自ら平和裡に解決す可きものであると信じて居た。然るに干涉結束團は國家主義(Nationalism)を強調し、國際主義の猶信賴す可からざることを主張した。

國際會議の實際を見るに。その主義理論及び宣傳がたとへ國境を超越し人種を超越するが如くに見えても、依然として論議者の心理には國家若くは人種的差別が主要觀念として働いてゐた。純なる社會問題及び經濟問題を論じられる時に當つても國家國民問題が主要部を占めて居ることは國際會議の開かるる毎に依然として變らなかつた。これを目撃した主戰論者はその標榜する國家國民第一主義が誤らない主張であることを悦んだ。これに反し民主主義社會主義者等は失望を常に重ねるばかりであつた。主戰論

者は好機逸す可からずとなし宣傳するに三綱目を提示した。綱目の第一は伊太利國民としての目的を遂行すること、第二は世界大戰に参加すること、第三は國民は舉國一致して犠牲を拂ひ協力すべきことであつた。

如上の事情より察し得るが如く一九一四年及び一五年頃の伊太利は主戰派非戰派、極言すれば國民派 (Nationalist) 非國民派 (Anti-nationalist) の二派が國家を兩分してゐた。彼等は互に鎬を削つて争つた。主義の争は優越者非優越者としての權力の争となつた。やがて主戰派が勝利を得、その主張するが如く伊太利は大戰に参加することになつた。然しながら主權派は戰爭に参加するに當つて不用意であつた。彼等が戰爭参加を承諾する際に自國に有利なる何等の協定をなしてゐなかつた。同盟國との協定に於て不明であつたのみならず。且つ戰爭の齎らす可き結果をも豫想しなかつた。彼等は戰爭遂行の方法に關しても、また糧食軍需品の供給に關しても、更に勝利の曉に獲得すべき利益に就

いても何等の協定をなさなかつた。

永續する大戰争には連戰連勝を豫期することが出来ない。一勝一敗ある毎に國民の精神は動搖する。主戰派非戰派は鎬を削りながら喜憂交々である。彼等は戦場の波瀾に應じて自己辯護の思想を創造し標語を念出する。相反する意義をもつて宣傳戰を國內に演ずる。互に眞の愛國者たることを示さんとする。これは必ずしも伊太利のみに起る現象ではない。兎も角も伊太利は大戰の勝利者の側に屬して戰爭を遂行した。斯くて大戰は一九一八年に終結を告げ翌年に戰爭参加の各國は戰勝の榮冠を戴く歸還兵を戦地から迎へることになつた。伊太利の軍人等はこの時豫期に反し彼等が戦地から歸還しても國家が彼等に生活の保証を與ふ可き何等の準備をしてゐなかつたことを見出した。彼等の不平を惹起した當然の責任者として主戰論者は彼等歸還兵の處分を考慮しなければならなくなつた。この時主戰派は彼等軍人を利用することを想ひ付いた斯くして出來上がったのが『舊軍人結束團』

(Fasci di Combattimento)であつた。願れば最初の革命派即ち Fasci d' Azione Rivoluzionaria にとつては結束團の鞍換を幾度かなした有様であり綱渡りの危い藝當をなしたのである。舊軍人結束團に於ては、主領株は依然革命結束團の首領株であるが、只手足たる黨員が舊軍人即ち在郷軍人と變つただけであつて、主義綱領に於ては何等の變改を見なかつたのである。

一九二一年に至つてはこの結束團は轉じて所謂今日のファシスト國民黨となり國民を擧げてフ黨化したのである。史的經路のみを辿るならばフ主義はボルシェイズムや共產主義の生れ出でざる以前に既に端を發してゐた。従つてフ黨は露國の共產主義の反動として起つたものであるとは云ひ難い。只社會主義の同一一起點から發足したものが種々の事情の結果全く正反對の終點に到着した丈けである。要するに露國の共產主義、伊國のフ主義は世界大戰が孕み孕んだ二大産物でありレニン及びムソリニはその産兒であるに過ぎない。

今日の伊國の天下はフ黨に屬するや否やによつて優越者と非優越者にとに分たれ、愛國者はフ黨員の專賣の如くになつてゐる。彼等は依然として國家若くは國民第一主義を唱へ、彼等の主張する國家國民の理想に反對する者は悉くその敵なりと云つて居る。ムソリニは斯くて自ら獨裁專制者(Dictator)となつた。獨裁專制者に對する非難の聲に應酬する爲めに曰く『議會政治は國事の裁斷を徒に遷延し政治家は政權慾を満足せしめるが施政の結果に就いては何等の責任を負はない。政治的理想及び社會理想を實現せんと欲するならば長年月の獨裁政治を必要とする。走馬燈の如く變る議會政治にては何等の經綸をも行ふことが出来ない』と云ふ。これムソリニが獨裁專制政治を主張する要旨である。

平等共產を主張する露國は獨裁專制若くは寡頭專制の政治を敢へてなしてゐる。民主主義と云ひ社會主義と云ひまた共產主義と云ひ標榜する主義看板に異る處があつても結局は獨裁政治に終極する。宣傳の巧妙なることを附和雷同の

愚衆によつて獨裁專制者は絶世の理想人となる。政治家は波瀾に棹さず舟子の如くであるが到着する彼岸の意外なことを見ても恬として耻ぢない。反つてこれを巧に利用する。

社會主義中の革命過激派から發足したムソリニが第一に國家國民第一主義を標榜し鐵拳主義の主戰論者となり、在郷軍人及び青年團を擁護して國民的思想を遂行する獨裁專制者となつてゐる。その獨裁振りは種々の反對潮流に對して如何なる關係を保持してゐるか。吾人は獨裁主義の理論に傾聽しそれと共に彼が今日まで行ひ來つた實際政治とを審に見たいのである。

一つの天體はその圏内に入る事物をその磁力の中心に惹きつける。伊國に足を踏み入れた旅客は彼ムソリニの磁力に惹きつけられる。磁力の性質如何はその圏外に出でて後に漸く知ることが出来る。

新著紹介

○鑛業地理

石川成章著 菊版六〇二+一〇〇+二四頁

圖版六二葉 東京金刺勞流堂 十一月 定價六圓五〇錢

本邦に於ける有用鑛物の分布、産狀、品質、用途等を中心として廣く世界諸國に於ける狀況を叙述した彪大な著書である就中炭田と油田とに就いては二百五十頁を費してかなり詳細に記述してある。有用鑛物の分布に重きを置いてあつて鑛業に伴はれた人文地理方面はあまり攻究されてない。本邦の鑛業資源に就いて知るには内容が豊富である故纏まつた便利な本である。附載された有用鑛物文獻は摘出が廣く研究者には都合がよいがあまり多すぎて玉石混淆の憾みがある(A)

○アイヌ語よ 日本地名研究

ジョン・パチラー著 一二

觀五×一五 觀五版 七四頁 九月 東京文録社 定價一圓

アイヌ語を以て日本地名を解釋せんとする先覺者であるパチラー氏の研究指針を示したものである。アイヌ語を説明して地名解釋の鍵を示し讀者の研究の基礎を解いたものであるから日本地名研究者を益する所が多い。(N)

○肥後藩の農村制度

内村政光著 四六版 二五九+

五四頁 玻璃版六葉 昭和四年七月 熊本地歴研究會發

行 定價一圓八〇錢

肥後藩に於ける地方制度を記録によつて編述したものである。地方制度上の著しいことは各郡を數區の手永に分け、手永は總庄屋が支配し、手永は之を村に分け、村庄屋が之を支配する。